

平成30年度 学校経営計画・学校評価シート

高知県立高知江の口養護学校高知大学医学部附属病院分校

《高知県の教育の基本理念》	(1)学ぶ意欲にあふれ、心豊かでたくましく夢に向かって羽ばたく子どもたち (2)郷土への愛着と誇りを持ち、高い志を掲げ、日本や高知の未来を切り拓く人材	《目指すべき姿》	学校像 児童生徒一人一人が主体的に活動し、自己を肯定的にとらえ、個々のニーズに応じた教育ができるよう支援を行う。 ○児童生徒が登校を楽しみにする学校 ○保護者から信頼される学校 ○医療関係者等と連携し協働できる学校 ○教職員が生き生きと仕事ができる学校	目指すべき組姿の概要 現に	○教育の保障と学力の向上 ・前籍校と連携して学習の空白や遅れを補い、安心して前籍校に復学できる学力をつける。 ・病状や実態に応じた適切な教育を行い、確かな学力をつける。 ○実態や発達段階に応じたキャリア教育【内面(心)へのアプローチ】 ・児童生徒が将来の夢をもち、病気を克服する意欲を高めることができる力を育む。 ・児童生徒が病状を理解して将来の職業について考える力を育む。 ○関係機関・関係者との連携 ・児童生徒や保護者が安心と希望をもつことができるように病院や前籍校等との連携を図る。
《取組の方向性》	①チーム学校の構築 ②厳しい環境にある子どもたちへの支援 ③地域の連携・協働		児童生徒像 主体的に活動し、自己を肯定的にとらえることができる児童生徒 ○自ら進んで学ぼうとする児童生徒 ○病気に負けず夢や希望に向かって進もうとする児童生徒 ○病気の回復や改善に必要な態度や習慣を身に付けた児童生徒 ○周囲に感謝と思いやりの心がもてる児童生徒		

《重点取組項目》

(評価 A:目標を十分に達成 B:ほぼ目標を達成 C:やや不十分 D:改善を要する)

項目	目標【P】	評価指標	具体的な取組内容【D】	中間評価【C】	年度末評価【C】	学校関係者評価	見直しのポイント【A】
（専門性に関する向上） （授業に関する向上）	○学習空白を作らないように個々の児童生徒に合わせた授業づくりを行う。 ○ICT機器を活用した教材教具の工夫を行う。	○個々の児童生徒の主要教科の未学習の内容を10%以内に抑える。 ○一人一人の教員のICT機器に関するスキルを上げるための研修を行う。 ○特別支援学校MIRAI/プロジェクトで「ICT機器を活用した教育支援等整備プロジェクト」の実施により、授業改善が行われるようにする。	○個々の児童生徒の前籍校での学習の進捗状況を確認する。 ○個々の児童生徒の前籍校での教科書を使用し学習を行う。 ○効率良く学習ができるためにICT機器を活用する。 ○機器の購入及び活用できるための研修を実施する。 ○教職員間で教え合う。 ○記録を取る。	○中学部は、3名中、2名の生徒はほぼ未学習なしで転出。1名は教科により差があるが、未学習約10%前後。 ○小学部は、5名中4名は未学習なしで転出。1名は教科により差はあるが、未学習は約8～10%程度であった。 ○テレビ会議システム活用のための外部講師による研修を1回実施。 ○テレビ会議システムを活用した交流及び共同学習を、本校分校間で1回実施。 ○テレビ会議システムを活用し、本校の研修会に参加。	A ○前籍校の教頭・担任等と連携し、学習進捗の確認をし学習を進めることができた。また、中学部は前籍校と同じ定期テストの試験問題を実施することができた。 ○学期末の評価についても前籍校と情報共有を行い、スムーズに評価することができた。 ○主要教科の未学習については、転出した12名中1名が病状等により学習時間が少なく達成できなかったが、他は未学習はない。 ○テレビ会議システム活用等のための研修会を年間2回実施した。実際にテレビ会議システムを活用した授業は、本校と分校間で1回、病室と教室間で3回実施することができた。 ○ICT機器を活用した「主体的・対話的で深い学び」につながる授業改善に向けて、チェックシートについて研究・作成し、実際に研究授業を行った。	A ◆質問1 分かりやすい教材教具を活用しているか？ 児童生徒 「5」83.3%、「4」16.7% 保護者 「5」83.3%、「4」16.7% 教職員 「5」71.4%、「4」14.3% 学校関係者 「5」35.7%、「4」31.0% ◆質問2 分かるまで教えてくれているか？ 児童生徒 「5」83.3%、「4」16.7% 保護者 「5」83.3%、「4」16.7% 教職員 「5」66.7%、「4」33.3% 学校関係者 「5」23.8%、「4」23.8% ○上記の学習に関する質問に対しては、児童生徒・保護者とも満足群の評価が100%となっており、高い評価をいただいている。学校関係者は評価がしにくい方位だと思われるため、参観週間等有効な活用について検討する必要がある。	○教室に来て学習できる児童生徒は未学習がなく転出できているが、ベツトサイド学習の児童生徒については治療に頑張りが、同時に学習に対して気持ちを維持するため支援が十分にできていなかったケースがある。よって、これまでにSC、医師・看護師、保護者、前籍校の担任と連携して対策を考える必要がある。 ○「ICT機器を効果的に活用した「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善」を進めるために本年度は教員の視点のチェックシートを作成し活用してきた。来年度は児童生徒の視点のチェックシートも作成し、授業改善に関する研究研修を進める必要がある。
（キャリア教育の充実） （児童生徒指導に関する向上）	○児童生徒が病状を理解した生活習慣を身に付けるために学校生活全般で指導、支援を行う。 ○将来の職業について考える力を育むよう学校生活全般で指導、支援を行う。	○挨拶や周囲の人に感謝等の気持ちを伝えることができる。 ○自分の病状に合わせた生活ができる。 ○特別支援学校MIRAI/プロジェクトの活用やゲストティーチャー、ボランティア等を招き、児童生徒が自分の将来の生活について考えるきっかけをつくる。	○挨拶や感謝等の気持ちの伝え方について、教員がモデルを示し、できたときは褒める。 ○自分の病状を的確に伝えられるよう学習を行う。 ○病状については、病院や保護者と連携しながら進め、児童生徒8名のうち7名は自分の病状と向き合いながら学習を進めることができた。1名は、気分がむらむらが多く、学習が難しい場面が時々見られた。 ○特別支援学校MIRAI/プロジェクトで「バン屋さんの仕事をしよう」や「社会人としてのマナーを学ぼう」を実施する。 ○ゲストティーチャー、ボランティア等を招き、絵本の読み聞かせや音楽教室等を実施する。	○はじめは、挨拶ができなかったり、相手に気持ちを伝えることが苦手な児童生徒もいたが、担任をはじめとした関わる教員が根気強く熱心に関わることで成長がみられる児童生徒がほとんどであった。 ○病状については、病院や保護者と連携しながら進め、児童生徒8名のうち7名は自分の病状と向き合いながら学習を進めることができた。1名は、気分がむらむらが多く、学習が難しい場面が時々見られた。 ○特別支援学校MIRAI/プロジェクトで「社会人としてのマナーを学ぼう」として、外部講師を招聘し「マナー講座」を実施した。	B ○転校したばかりは、登校・下校時の挨拶ができなかったり、声が小さかったりなど、うまくできない児童生徒もいたが、挨拶をうながしたり、教員が率先して挨拶したりすることで、徐々にできた。 ○多くの児童生徒は、自分の病状について医師や看護師と相談することができていた。また、調子が悪い時はその状況を教員に伝えることもできていた。しかし、中には入院が長引き、ストレスが溜まる生徒がおり、そういった生徒への対応が課題となっている。 ○本年度は、「マナー講座」、「バン屋さんの仕事をしよう」、「マジックショー」、「のどカルテット(音楽特別授業)」、「ママアウンサーによる絵本の読み聞かせ」を実施することができた。中でも、バン屋さんの授業では、児童から積極的な質問が出る等、充実した学習となった。	B ◆質問3 先生に相談しやすいか？ 児童生徒 「5」16.7%、「4」16.7% 保護者 「5」50.0%、「4」33.3% 教職員 「5」50.0%、「4」33.3% 学校関係者 「5」26.2%、「4」19.0% ◆質問4 理解し助けてくれているか？ 児童生徒 「5」50.0%、「4」16.7% 保護者 「5」83.3%、「4」0.0% 教職員 「5」71.4%、「4」28.6% 学校関係者 「5」23.8%、「4」33.3% ○質問3について、児童生徒にとっては相談事や心配事があり無かったりめや低い評価となっているのではないかと考えているが、質問4がやや低めなのはもう少し児童生徒に寄り添いコミュニケーションをとる必要があると考える。保護者はほぼ満足していただいている評価となっている。	○病状や治療の状況により、長期ベツトサイド学習になる児童生徒は、ストレスが溜まったり、生活リズムがうまく作れなかったりなどして、学習に向き合うことができなくなるケースがあった。今後の対応策について検討していく。 ○児童生徒の悩みや不安を聞き取りやすい接し方・態度についての教員の研修を行う。 ○今後も、児童生徒の興味関心を考えながら、様々な職業の方々を招き、身近に接している医療の仕事も含めて、働くことへの意識を広げる機会となる取組としていく必要がある。 ○また、働くことへの興味関心のみではなく、入院生活のストレス軽減の場としての視点も大切にしていきたい。
（学校運営に関する向上）	○病院、保護者、前籍校との連携を図り、学習の保障と円滑な前籍校復学を図る。 ○特別支援学校としてのセンターの機能を発揮する。	○医教連絡協議会や医教連絡会を継続し、必要に応じて院内の各分野と連携した会を実施する。 ○必要に応じて交流及び共同学習を実施する。 ○地域に開いた研修会(1回)を実施する。 ○地域の教育委員会の要請による教育相談に対応する。	○医教連絡協議会(2回)の実施。 ○医教連絡会(5回程度)の実施。 ○必要に応じての支援会議の実施(前籍校、病棟、分校等) ○参観週間等の案内を行う。 ○ホームページの更新を行う。 ○地域に開かれた研修会を計画し、案内を行う。 ○地域の教育委員会の要請による教育相談への対応を行う。	○医教連絡協議会は、第1回を6月4日に実施。 ・平成29・30年度の分校の児童生徒の状況について ・平成30年度の分校の活動計画について ・分校と病院との連携についての確認 ・学校評価について ○医教連絡会は、第1回を7月2日に実施。 ・小児病棟と学校間の確認事項について ・学校保健委員会について ○校内研修(医療講話)を4回実施。その内、2回は、医療センターの三里分教室の先生が2名参加。	B ○医教連絡協議会は年間2回実施。医教連絡会を学期に1回、年間3回の実施となった。 ○児童生徒の病状や転出入に合わせて、医師への病状等についての聞き取りや保護者・前籍校への聞き取りを実施した。また、状況に応じて支援会やケース会を実施することができた。特に転出時については、前籍校と密に連携し、医師・看護師・前籍校(管理職・担任・養教)・本校教員の支援会を実施することができた。 ○校内研修(医療講話)を年間6回実施。スクールカウンセラーを講師とした人権研修を2回、感染対策に関する研修会1回実施し、病弱特別支援学校の教員の専門性の向上に努めた。また、これらの研修の中の医療講話については、本校や医療センターの三里分教室へ研修案内を行った。(分教室の先生は4回参加) ○地域の小中学校に対しては、地域支援担当教員を中心に、要請によって教育相談等をスムーズに実施することができた。	B ◆質問5 前籍校との交流(連携)ができている？ 児童生徒 「5」33.3%、「4」16.7% 保護者 「5」66.7%、「2」16.7% 教職員 「5」44.4%、「4」44.4% ◆質問6 病院との連携はできているか？ 児童生徒 「5」33.3%、「4」33.3% 保護者 「5」66.7%、「4」16.7% 教職員 「5」57.1%、「4」42.9% 学校関係者 「5」54.8%、「4」31.0% ○質問5については、児童生徒はやや低い評価となっているため、今後どのような交流が必要か状況に合わせて検討する必要がある。保護者に関しては「あまり思わない」という評価があった。これは分校に対しては無かったものの、保護者がそういった評価にならないように、こちらからも少し前籍校と密な連携を取る必要があったと考える。 ○質問6は、他の質問項目と比べ学校関係者から高い評価をいただいている。今後も連携を充実させていきたい。	○医教連絡会は当初、年間5回としていたが、今年度は3回の実施であったが、転入・転出時には、医師や看護師と連携し実態把握を行っているため、今後は回数を決めるのではなく、児童生徒の転入の状況や病状等を考慮して、必要に応じて開催する。 ○ホームページの更新は行ったが、今後は、本校に合わせてホームページを新しいものに更新する。